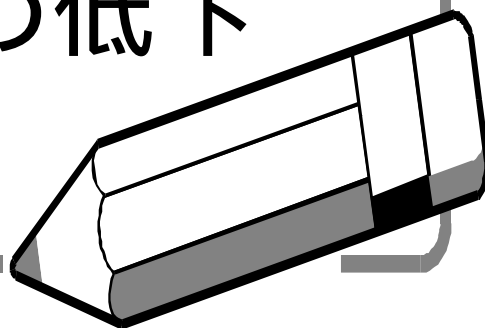


受験競争回避と

学力の低下

みつばやしけいこ



基礎学力の見直しを

高等学校も大学も、推薦入学の入学者が多くなり中学校・高等学校の成績さえよければ、無試験で入学できる制度が広がって、大学入試平均100%合格が予測されている西暦2008年には、入学試験が大きく変わることだろう。その前兆は徐々に始まっている。

新入学の華やいだ季節が過ぎて、中学校、高等学校とも、一学期の中間試験が終わると、生徒達は、新しい集団の中での学力レベルが気になり始める。

近年、私の学習塾では、受験を看板に掲げていないのに、受験生が大半を占めている。不況で一般家庭の子どもの教育費が切り詰められているから、どうしても受験の間際になって、必要を感じて入ってくる生徒が多い。内申点を上げるのが目的だから、受験科目以外には手が出ない。来られる時間数も少ないから、もっぱら基礎に時間のかかる数学に力を入れている。1教科が伸びて自信がつけば、自然に他の教科に時間も余力も回せるようになる。

数学は特に、自分で考え、自分で計算しなければ、目で見ても覚えればよいというわけにはいかない教科だから確実に力になる。

この方法で、今年度、高校入学生の中には、中学1年生のはじめに、学年順位中くらいだったのに、3年卒業時には、学年1位で卒業した生徒もいる。彼は最初、「先生、分かりません」を連発していて、あまり頻繁なので、「説明すべきところはするけれど、これは考えてください」と、私が言い続けてきた生徒であった。

ところが、まもなく考えぬくようになり、自学自習の習慣と力をつけて、定期試験では全教科高得点が並ぶようになった。

コース制高校の数理科学を選んで、推薦入学すると、

「先生、僕達は、自分で実力をあげたんだよね。先生にほとんど教えてもらってないものね」と、言った。

「高校へ入学して、自分で出来ないような生徒を送りこんだんじゃ、塾としても困りますからね」「でも、この塾、何かあるんだよね。僕、1年の最初、70位だったからな・・・」と、感慨深げだ。

基礎学力とは、もちろん、相当部分、知識事項を元とするものだが、とにかく、何が出来るとか、出来ないという基準で測られる。見直したいのは、知識の量でも、テストの正解率でもなく、どこまで基礎的なことを自分の力で考え、論理的に消化出来るか、という力であるように思う。

塾生たちの学力傾向

今年、新しい高校受験生に見られる傾向は、小学校の5～6年生の基礎学力が、十分でないことである。一般的に国立・私立の中学受験を経験した生徒と、受験をしなかった生徒との、算数・国語の基礎学力の差は大きい。受験だけを目的とする教育は、競争論理で追い立てることになるので、決してよいことばかりではないが、公立小学校が、受験しない生徒達に十分な基礎学力をつけてきているかと言うと、決してそういうわけではない。

「学級崩壊」と言われ、生徒達が聞く耳をもたず悪戦苦闘している先生、あげくは病気になってしまう先生のクラスでは、複数の先生の代講が続けられて、授業が一貫しないため、生徒達の教科学習に向かう姿勢はとても不安定で自信がもてない場合が多い。小学校で、先

生をいじめていたというクラスの生徒達も、基礎学力が欠落していて、中学3年生までのマイナスを引きずっているものが多い。

数学の基礎学力低下

例えば、中学3年生の数学で、素数の説明をするときに、最小公倍数、最大公約数の意味を復習するのだが、小学校で覚えているはずの意味と、計算のしかたが、標準的学力の生徒にも分かっていない場合が非常に多い。

しかし、受験のため学習塾へ来る場合は、生徒も真剣なので、相当わからない生徒も、30分もかければ、「わかった」と、完全に理解する。

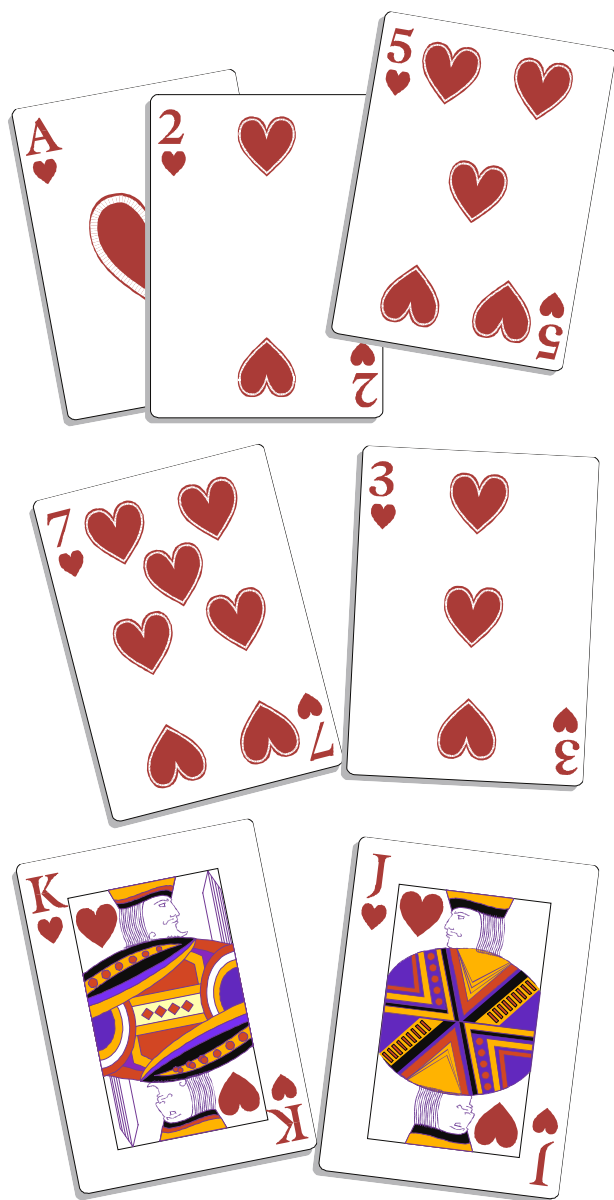
「素数」の説明では、1から100までの数をあげて、「1と自分の数の、2つ約数をもつ数」だけを残して、1つあるいは3つ以上の約数をもつ数字を消していく作業を、それぞれにさせる。自分で作業をして確かめれば、まず、素数を理解できない生徒はいない。素数の意味が理解できれば、最大公約数も、最小公倍数も、その計算のしかたも意外に早く理解する。

では、小学校でならった計算のしかたを子ども達は、なぜまったく忘れているのだろうか。小学校では、たとえば、最小公倍数を教え

る場合、分かりやすく、2つの数のそれぞれの倍数を、2倍の数、3倍の数・・・と順番にあげさせて、1番小さい共通の倍数を最小公倍数と教える。この方法は丁寧で、意味を理解させるには必要な過程である。しかし、すべての最小公倍数をこの方法で出すのはとても時間がかかる。そのさきの、計算の方法となると、本当に教わっていないのか、まったく分からない生徒が多い。

すべての自然数は、1を除いて、素数であるか、あるいはいくつかの素数を掛け合わせてできた数であるということを、よく理解させることが必要である。そうすれば、2つの数を共通の素因数で割って行って、割った数と商とをすべて掛け合わせると、最小公倍数が得られることが分かる。

しかし、小学校の授業では、素数も因数の概念も教えないまま、計算の方法だけを教えられるので、子ども達はまったく理解できないか、通り一遍の計算技術だけで忘れてしまっているのであろう。出来るのは計算だけを反復指導され、中学受験を経験した生徒ばかり、ということにもなる。



大学生・高校生の学力低下

最近、大学生から、塾で教えてほしいという電話が入る。例えば、大学の理系に入ったけれど、高校のレベルの物理と数学の基礎が出来ていなくて、講義についていけないからと言う。予備校のようなところの、一斉指導では難しいので、個人指導で、という注文である。

大学生の個人指導というと、出来る人が限られてしまううえ、予習が必要だから個人指導料金が安くては引き受け手が無い。まず大学へ入ればいいという考えで、基礎固めを怠ると、このような不経済な事態に直面しなければならない。受験競争は確かに問題だが、だからといって、「ゆとりの学習」と称し、基礎学力まで疎かにして、要領よく推薦入学のルールに乗るのは考えものである。

進研アドの調査では大学自体も、この現象には困り、全体の約3割の大学や2割の短大で、リメディアル教育と呼んで基礎学習のための補習講義を実施し始めているという。

受験のための詰め込み教育への批判、ゆとりの学習の奨励で、高校の必須科目が減り、選択教科の幅が広がって、高等学校の学習内容が大学に移行し、中学校の学習内容が高等学校に移ってしまったという批判もある。

自発的学習の習慣づけ

子ども達の不登校や、いじめや自殺、犯罪行為がエスカレートして、それらは受験教育の激化による心のひずみ、人間関係のひずみが一因であると多くの人が認めてきた。そこで、学齢人口の減少とあいまって、教育制度の面でも意識の面でも競争の緩和が図られてきた。そのこと自体に問題はないと思われるが、あまり学習をさせないほうがよいという、間違ったムードができてしまい、塾通いも非難のやり玉にされて、子どもたちの学力は平均的に年々下降線をたどってきている。

受験競争に追い込んで、競走馬のように走らせるのはよくないが、子どもたちの自主的な学習は大いに奨励されるべきであろう。

学習に夢中になれることほど有効なストレス解消法はそんなにはないように思う。おおかたのいじめや、学校の雰囲気や成績などは問題にならなくなるであろう。ただし、人から言われたことをするのではなく、自分自身が、興味のあることを見つけて自主的に学習する場合の話である。

そのために、大人にできることは、環境を整え、可能性を広げるための、サポートをすることだけであろう。子どもは自主的に勉強など

するはずがないという迷信を信念にしている大人達は、自分自身が興味をもって学習することのない不幸な生い立ちであったと考えたほうがよい。

学習塾で、長年、じっと見ているだけの大人でいると、長い時間かかっても、子ども達は何かしら真剣になれるもの、好きなものを見つけて、頑張り始める。成績はあとから自然についてくるものだ。

塾では、学校の教科に限られてしまうが、長い人生で、自分が継続して打ち込めるものを探すことは、そういう自主性の延長上であって、人から与えられるものではない。

戦後の自由な教育で育てられて

自主学習といえば、戦後、日本の教育がはなやかに自由と平等をうたって変身した時代には、自由学園の教育が手本とされ、実際に子ども達の自主性を大切に教育が実践された。教師達も、戦争中、飛行機の設計をしていた人であったり、軍需工場で働いていた人であったりしたから、多分、どうしたらいいのか分からなくて、子ども達といっしょになってよく遊んだ。宿直室に子ども達を集めて、面白い本の話子どもたちから聞き出したり、将棋



や五目ならべに熱中して、子どもに負かされながら、真剣勝負で対戦していた。子どもと謙虚に対等に向き合う姿勢が、どの教師にもあった。

学習は教科書がなくて、教科によってあってもお粗末で、自主学習が基本であった。学校の成績など、良い子も、良くない子も同じように、興味のある本を手当たり次第によく読んだ。

今の文部省の教育課程や指導要領に照らして、重箱の隅をつつくような評価をするなら、当時の子ども達の学力は非常に低いということになるであろう。しかし、大半が中学を出れば就職したから、大人の本棚から、だれもが読めるものを読みあさっていたり、隣のおじさんから仕事人の哲学を聞かされたり、人生を自分にひきつけて深く考え、学び、行動し、生きる力を備えていたように思う。

また、焼け跡時代の中学生は学問的に非常に低いことをしていたかということ、数学で言えば、今、高等学校の範囲に格上げされている「三角関数」は中学で懇切丁寧に指導されたし、「開平(数の平方根の計算)」も教えられていた。今では、コンピューターがはじき出すせいか、高校生でも「開平」の計算法を知らない生徒が多い。

魔法陣なども小学校で教わって、一辺が奇数の方阵なら、どんなに大きな数列になっても縦、横、斜めに合計すると和の数が等しくなる数列を組み立てることが出来た。

要するに、三角関数を中学校で教えようと、高等学校で教えようと、だから中学生の学力が落ちたということではない。文部省の、指導要領は時代とともに変わっていくが、子ども達の興味と関心を中心に、どんな時代にも通用する、論理的な思考力を評価するような学力観であってほしい。

教科学習では、子ども達が遊び感覚で引き込まれていくような、不思議なことを題材にして、時間を掛けて子どもの関心と興味を引

き出していくことが大切であろう。

私は、開平も、魔法陣の作り方も、ほんの少女のころのある1時間で教わったきり、その後どこでも教わらなかったが、今それを間違いなく説明できる。数学のテストを受けるとき、そんなものはなんのプラスにもならなかったけれど、自分にとっては、長い年月、数の不思議とその論理を考える材料になっている。だから、何十年たっても忘れることがないのである。

今、知識と思考力の両面で学力低下は確かにある。逆に言えば、これまで、受験のために子ども達が無理をしていたためである。だから、再び自由に考えるゆとりを奪うようなカリキュラムは避けてほしい。

子ども達が、自分自身の興味を中心にじっくりとものごとを考え、点数にはならなくても、納得がいくまで考え続けることができるような環境を整えることこそ、真の学力のために必要なことであろう。

